

TR-I-0158

合成的字音語のアクセントと字数  
Accent of Sino-Japanese Complex Word  
and the Number of Characters

定延利之、匂坂芳典  
Toshiyuki SADANOBU and Yoshinori SAGISAKA

1990.3

内容梗概

現代日本語の語彙とアクセントを考える時、語数・生産力ともに豊富な字音語は看過できない。本稿は(合成的)字音語を和語及び外来語から切り離して集中的に考察した。その結果、主に次の①②③を得た。①字音語のアクセント型は構成要素の字数と大きく関わっている。②特に従来うまく処理できなかった2字字音語のアクセント型も、これを「1字+1字」として別個に扱うことにより、約86%は正しく予測できる。③字音語におけるresettingの成否も、やはり構成要素の字数と大きく関わる部分が有る。

ATR自動翻訳電話研究所

ATR Interpreting Telephony Research Laboratories

© (株)ATR自動翻訳電話研究所 1990

© 1990 by ATR Interpreting Telephony Research Laboratories

## 目次

- 0 . はじめに/1
- 0 . 1 . 本稿の中心的主張/1
- 0 . 2 . 用語の説明/1
- 0 . 3 . アクセント型の記述方式/1
- 0 . 4 . 参考とした資料/2
- 0 . 5 . 各章の概要/2
  
- 1 . 結合結果のアクセント型と字数/2
- 1 . 1 . 前部字音要素も後部字音要素も共に1字の場合/2
- 1 . 2 . 前部字音要素が2字以上・後部字音要素が1字の場合/4
- 1 . 3 . 前部字音要素が特別なもので後部字音要素が2字の場合/5
- 1 . 4 . 前部字音要素が特別なものでなく後部字音要素が2字の場合/6
- 1 . 5 . 後部字音要素が3字以上の場合/8
- 1 . 6 . 結合結果のアクセント型のまとめ/10
  
- 2 . resettingの成立と字数/12
- 2 . 1 . 前部字音要素が接辞的な場合/12
- 2 . 2 . それ以外の場合/15
  
- 3 . まとめ/18
  
- ★(7)について/19
  
- ★[謝辞]/28
  
- ★[注]/28
  
- ★[参考文献・参考資料]/30

[ 0 . はじめに ]

[ 0 . 1 . 本稿の中心的主張 ]

本稿は、現代日本語東京方言における合成的字音語のアクセントを観察するものである。但し、零から十までの数詞や、零から十までの数詞を含むものは対象としない。

本稿の中心的主張は(1)にまとめられる。

( 1 ) 合成的字音語のアクセントに対して規則を設定する場合、字音要素の字数ごとに異なった規則を設定することが望ましい。

合成的字音語のアクセントについては従来、国語学方面(例えば奥村1963)・言語学方面(例えばMcCawley1977)・情報処理方面(例えば佐藤1989)等で部分的にせよ研究されてきたが、筆者の知る限り(1)はどの方面からも全く主張されていない。

[ 0 . 2 . 用語の説明 ]

上と前後する形になるが、本稿で用いる「字音語」「字音要素」、並びに「結合」「語」「結合結果」といった用語について、簡単な説明を加えておく。

野村(1987,1988)によれば、古代から近世に至る期間に中国からもたらされた語(例えば横行・横逆)を「漢語(狭義)」と言うことが有る。また、それにならって日本で造語された和製語(例えば横領・横柄)をも含めて「漢語(広義)」と言うことが有る。後者は前者との混同を避けるため、特に「字音語」と呼ばれる。この「字音語」の構成要素を本稿では「字音要素」と呼ぶ。字音要素は、例えば合名会社における会社のように、語であることも有るし、製品化における化のように、語でないことも有る。

本稿は考察対象を「合成的字音語」とするがこれは、字音要素どうしが結び付いてできた語、つまり2個の字音要素が結び付いてできた語の意味で用いてある。従って1字の字音語(例えば鉄・急・徳)は考察対象ではないし、また市町村や春夏秋冬のような、3個以上の字音要素が一度に結び付いてできた語も考察対象ではない。結び付く2個の字音要素のうち、前を「前部字音要素」、後を「後部字音要素」と称することにする。

本稿では、字音要素の結び付きを、字音要素の「結合」と呼ぶ。この「結合」は、野村(1987)の「結合(用法)」とは異なる。例えば不十分・具体化に見られるような、接辞付加(affixation)的な色彩が濃い結び付きも、本稿の「結合」である。

本稿で用いる「語」の概念は、resettingの成立と両立可能なものとする。つまり本稿では、「語」の中でresettingが成立し得ると考えておく。

字音要素どうしが結合してできた語を、簡単に「結合結果」と称す。

また以下、本稿で用いる「アクセント」とは、全て現代日本語東京方言のアクセントを指すものとする。

[ 0 . 3 . アクセント型の記述方式 ]

本稿ではアクセント型を「1型」「0型」等と記述することも有るし、「頭高型」「平板型」等と記述することも有る。また本稿では、「○○の

アクセント型は～型」(例えば「会社のアクセント型は0型」という意味で、単に「○○は～型」(「会社は0型」と言うことが有る。

[ 0 . 4 . 参考とした資料 ]

金田一他(1989)を中心とし、他に金田一他(1981)、「日本語発音アクセント辞典」、金田一・池田(1978)、田島・丹羽(1978)、風間(1979)を一応の参考としたが、特に長い語についてはほとんど記載されていないこともあり、筆者作成のデータも適宜補った。

[ 0 . 5 . 各章の概要 ]

以下は3つの章で構成されている。1章と2章では、結合結果のアクセントを、字数情報を用いて記述する。具体的な例を挙げて、字数を考慮するメリットを明らかにしたい。1章は結合結果がresettingを生まない場合、2章は結合結果がresettingを生む場合を対象としている。3章では以上をまとめる。

[ 1 . 結合結果のアクセント型と字数 ]

上述のとおり、ここでは結合結果にresettingが生じない場合を扱う。字音要素の結合を、結合する要素の字数ごとに(2)のように分ける。

( 2 )

- [ 1 . 1 . ] 後部字音要素が1字で、前部字音要素も1字
- [ 1 . 2 . ] 後部字音要素が1字で、前部字音要素は2字以上
- [ 1 . 3 . ] 後部字音要素が2字で、前部字音要素が特別
- [ 1 . 4 . ] 後部字音要素が2字で、前部字音要素が特別でない
- [ 1 . 5 . ] 後部字音要素が3字以上

以下、(2)に記した順で結合結果のアクセント型について観察する。

[ 1 . 1 . 前部字音要素も後部字音要素も共に1字の場合 ]

ここでは前部字音要素・後部字音要素が共に1字の場合、つまり2字の字音語について観察する。議論の流れとしては、(3)に記した順に沿う。

- ( 3 )
- a. まず例として『日本語アクセント辞典』(1985:付録)の記述の不備を指摘し、字数を取り込んだ記述の必要性を説く。
  - b. 次に2字字音語につき、原則を提案する。
  - c. 更に(3b)吟味の一応の目安として、金田一他(1989)の検索結果を報告する。
  - d. (3c)の検索で例外となったものの一部について、補足的規則の例を示す。

筆者の知る限り、2字字音語のアクセントについては従来、さほど本格的には取り組まれていないようである。例えば『日本語発音アクセント辞典』(1985:付録185)は、後部字音要素が質の場合を一律に(4)のように規定している。

- (4) 後部字音要素が質である場合、結合結果のアクセント核は、前部字音要素の最終拍上(但し最終拍がアクセント核を担い得ない、或いは担いにくい音であればその直前拍上)に来る。

(4)は、前部字音要素が2字の場合には確かに妥当する。例を(5a)に示す。しかし(3)が2字字音語には妥当しないことは(5b)の例(全て0型)を見れば明白である。「日本語発音アクセント辞典」(1985:付録)の記述からは、前部字音要素が1字の場合が脱落していることになる。(断っておくが、「日本語発音アクセント辞典」(1985:付録)がそもそも2字字音語を対象としていないというわけではない。例えば軍医や文士は記載されている。)

- (5) a. 無機質 神経質 象牙質 筋肉質 動物質 分裂質 蛋白質  
b. 角質 音質 画質 資質 実質 体質 硬質 材質 悪質

なお、無機と角は共に2拍・2音節であるから、前部字音要素の拍数ならびに音節数は、(5a)無機質と(5b)角質のアクセント型の違いを反映していない。従って(5a)(5b)を共にうまく処理するには、前部字音要素の拍数・音節数ではなく字数に頼らざるを得ない。

本稿のように、前部字音要素の字数を記述に取り入れれば、(5a)は2.1.、(5b)は2.2.で扱われることになり、別々の規則で処理が可能となる。以上で(3a)の内容は説明できたと思う。

次に(3b)のとおり、2字字音語について、単純な原則を提案する。この原則は、(6)にまとめられる。以上で(3b)を終わる。

- (6) a. 結合結果は原則として1型か0型である。  
b. 後部字音要素が1拍なら原則として1型である。  
c. 後部字音要素が2拍なら原則として0型である。

勿論、(6)の反例は誰でも容易に、沢山思い付くことができる。しかし、(6)に合致する例は、それよりも遥かに多いのではなかろうか。

(6a)(6b)(6c)について、参考として金田一他(1989)を検索した結果、それぞれ(7a)(7b)(7c)を得た。(7b)(7c)をまとめたものが(7d)である。なお(7)中の語数は全て異なり語数である。詳細は本稿末尾に記載したので参照されたい。以上で(3c)を終わる。

- (7) a. 2字の字音語27437語のうち、(6a)どおり1型か0型のものは26877語(約98%)有り、1型でも0型でもないものは560語(約2%)有る。  
b. 2字の字音語で後部字音要素が1拍のもの6038語のうち、(6b)どおり1型のものは、4699語(約78%)有り、1型でないものは1339語(約22%)有る。  
c. 2字の字音語で後部字音要素が2拍のもの21399語のうち、(6c)どおり0型のものは、18997語(約89%)有り、0型でないものは2402語(約11%)有る。  
d. 2字の字音語27437語中、(6b)(6c)が正しく予測するものが23696語(約86%)、誤って予測するものが3741語(約14%)有る。

ところで(7b)(7c)において、(6b)(6c)が誤って予測したもの(本稿末尾に記載)を見ると、特定の字音要素がよく現れることに気付く。これに注目すれば、例えば(8)のような、(6)の例外を律する諸規則の設定が可能になる。

- (8) a. 後部字音要素が数・曜である場合、結合結果のアクセント核は後部字音要素第一拍の上に来る。  
b. 後部字音要素が化・座・車・譜である場合、結合結果のアクセント型は平板型になる。  
c. 後部字音要素が語・書・図(ず)・(「建設」の意での)立・話である場合、結合結果のアクセント型は、前部字音要素が1拍なら1型、前部字音要素が2拍なら0型になる。  
d. 前部字音要素が各・次・先・前・全・同・当・本であり、determiner-like或いはquantifier-likeな意味を持てば結合結果は1型になる(注1)。また、儒であっても1型になる。  
e. 後部字音要素が(「国」の意味での)州であれば結合結果は1型になる。

(7b)(7c)における例外のうち、本稿末尾で下線を施して記載したものは、(8)の設定によって処理可能となる。(8)のような規則を加えていくことで、(7)に記したアクセント予測的中率の更なる向上が期待される。

但し、(8)に挙げた規則も、反例が全く無いわけではない。金田一他(1989)による限り、例えば理数・次点は0型、純化・鎮座・画譜・文書は1型であり、例外となる。このように、(8)のような規則の設定によって、これまで予測できていたものが反例となることも有り得るため、(8)のような規則の設定に際しては特に慎重になる必要が有る。(8)に挙げた規則は、設定によって処理できるようになる語数の方が、処理できなくなる語数より遥かに大きいことを考慮して、設定に至った次第である。

また前車のように、例えば(8b)と(8d)が異なる結果を予測することが考えられる(この場合、実際には(8d)のとおり1型になる)。このような規則の衝突自体は、勿論望ましいものではないが、重大な問題点とは思われない。何故ならば一つには、規則間に優劣関係を設定すれば解決できると思われるからであり、また一つには、そもそも(8)は(6)同様、規則というより傾向に近いものだからである。以上で(3d)を終わる。

[ 1 . 2 . 前部字音要素が2字以上・後部字音要素が1字の場合 ]

この場合は(9)が妥当すると考えられる。(9a)(9b)(9c)の例をそれぞれ(10a)(10b)(10c)に示す。(注2)

- (9) a. 結合結果のアクセント核は原則的に前部字音要素の最終拍上に来る。  
b. 但し前部字音要素の最終拍がアクセント核を担い得ない、或いは担いにくい音(引く音・撥音・促音・下り二重母音「い」・無声化母音)であればその直前拍上に来る。  
c. 接辞的色彩の濃い特定の後部字音要素は、結合結果を0型にする。

- (10) a. 先駆者 外野手 展示会 危機感  
 指揮権 掃除機 再逮捕者  
 b. 故障者 運転手 発表会 不安感  
 所有権 冷却機 科学者 初出場者  
 c. 具体化 意図的 遊技場 安全性 種類別 出身地別

(9)の規則自体は、従来からよく知られている規則であって、特に新しいものではない。ただ、字音語について(9)の規則が妥当する領域を[前部字音要素が2字以上・後部字音要素が1字の場合]と特定した点は、新しいと言える。

[1.3.前部字音要素が特別なもので後部字音要素が2字の場合]  
 本節での議論の流れは(11)に沿っている。

- (11) a. 前部字音要素が御(ご)の場合を紹介する。  
 b. 後部字音要素の字数を記述に取り込む必要性を確認する。

まず、前部字音要素が御(ご)の場合を見てみよう。

- (12) 2型 御理解 御好意 御無体 御丁寧  
 御神体 御住所 御窮屈 御苦勞  
 3型 御職業  
 4型 御返事 御用件 御冗談 御表情  
 0型 御機嫌 御発展 御卒業 御旅行  
 御考察 御同輩 御指名 御協力

(12)の後部字音要素のアクセント型を(13)に記す。

- (13) 1型 理解 好意 無体 丁寧 神体 住所 窮屈 苦勞  
 2型 職業  
 3型 返事 用件 冗談 表情  
 0型 機嫌 発展 卒業 旅行 考察 同輩 指名 協力

(12)(13)から(14)が得られる。以上で(11a)を終わる。

- (14) 前部字音要素が御のような特別の要素で後部字音要素が2字の場合、後部字音要素が0型なら結合結果も0型になる。後部字音要素が0型でなくアクセント核を持つなら、結合結果のアクセント核はそれと一致する。(これは結局、1.5.で後述する[後部字音要素が3字以上の場合]と同様と言える。)

このような御は句坂(1985:62-3)によれば「一体化型の接頭辞」、つまり後部要素のアクセントに何ら影響を与えない接頭辞ということになる。但し御は、後部字音要素が何字であっても、(14)のような効果を及ぼすというわけではない。後部字音要素が1字の場合は、(15)のように、(14)の効果を必ずしも及ぼすわけではない。

- ( 1 5 ) a. 御精 ( 2 型 ) 御坊 ( 1 型 ) 御報 ( 0 型 )  
 b. 精 ( 1 型 ) 坊 ( 1 型 ) 報 ( 1 型 )

念のために言うが、後部字音要素が2拍の場合が例外というのではない。(16)のとおり、後部字音要素が2拍でも2字ならば(14)が妥当する。以上で(11b)を終わる。

- ( 1 6 ) a. 御趣味 ( 2 型 ) 御首尾 ( 2 型 ) 御加護 ( 2 型 )  
 b. 趣味 ( 1 型 ) 首尾 ( 1 型 ) 加護 ( 1 型 )

従来の記述と比べた場合、本節の目新しさは、(14)のように後部字音要素の字数を記述に取り入れた点と言える。尚、本節に該当する前部字音要素の例としては、御の他に、……的が考えられる(例えば水準も美的水準も0型、同じく制裁も経済的制裁も0型である)。

[ 1 . 4 . 前部字音要素が特別なものでなく後部字音要素が2字の場合 ]  
 本節での議論の流れは(17)に沿っている。

- ( 1 7 ) a. (18)を規則として紹介し、例を挙げる。  
 b. 後部字音要素の字数によっては、(18)が妥当しないことも有ることを示し、記述に字数を取り入れることの必要性を再確認する。  
 c. (18)の少数の例外に関して、佐藤(1989)に触れる。

前部字音要素が御のような特定のものでない限り、後部字音要素が2字なら原則として(18)が妥当する。例を(19)に示す。以上で(17a)を終わる。(注3)

- ( 1 8 ) a. 後部字音要素が中高型なら、結合結果のアクセント核は後部字音要素のアクセント核と一致する。  
 b. それ以外(つまり後部字音要素が頭高型か尾高型か平板型)なら、結合結果のアクセント核は後部字音要素の第一拍上に来る。

- ( 1 9 ) a. 後部字音要素が中高型の時  
 大迫力 高圧力 熱力学 珍植物  
 高山植物 運動力学 公的圧力 平均握力 絶対多数  
 b. それ以外の時  
 (後部字音要素が頭高型) 古美術 私文書 死火山 女生徒 他区域  
 義兄弟 多趣味 未処理 無価値 過保護 飛距離 不首尾  
 中規模 熱処理 核基地 大事故 総書記 洋菓子 重装備  
 正社員 塾講師 食文化 脳天気 肺機能 好人物 左大臣  
 異民族 怪電波 和菓子 定位置 県議会 高品位 純利益  
 付加価値 予備審査 模擬裁判 自動書記 自衛手段  
 非常階段 健康器具 公共事業 闘争本能 海底火山  
 生物兵器 怪物投手 編集者会議 生産者米価 消費者本位  
 金本位制度 多民族国家



(後部字音要素が尾高型)	不愛想	市役所	食道楽	女子便所		
兄弟名儀						
(後部字音要素が平板型)	脳外科	毎時間	半狂乱	円運動	性犯罪	
内出血	核分裂	点対称	非課税	助監督	諸事情	希硫酸
怪気炎	新記録	初対面	打楽器	亜光速	鉄仮面	微調整
銀食器	股関節	英単語	新体制	私小説	重過失	赤血球
低血圧	総需要	最下層	老婦人	貴婦人	大抜擢	諸制約
仮死状態	作業仮説	企業秘密	心理描写	同時進行		
繊維食品	地方条例	失業保険	共同経営	敵対会社		
人気投票	帝王切開	生産者連盟	不逮捕特権	不在者投票		
不景気対策	日米間摩擦					

(19b)の諸例の前部字音要素のうち、例えば無価値の無・総書記の総は、句坂(1985:62-3)では「自立語結合型」の接頭辞(つまり平板型や尾高型の後部字音要素はその第一拍にアクセントを転じ、頭高型・中高型の後部字音要素に対しては影響を与えない接頭辞)とされている。が、無や総が常にそのような効果を持つわけではない。(20)を見ればわかるように、後部字音要素が1字の場合は例外となる。

- (20) a. 無欲(頭高型) 無害(頭高型)  
           總會(平板型) 総論(平板型)  
       b. 欲(尾高型) 害(頭高型)  
           会(頭高型) 論(頭高型)

念のために言うが、(20)のような例外は「後部字音要素が2拍の場合」とまとめるよりも、「後部字音要素が1字の場合」とまとめる方が望ましい。後部字音要素が2拍でも2字なら無価値・総書記のように(18)の予測どおりになるので、例外にはならない。従って(18)は、後部字音要素が何字の場合でも妥当するのではなく、2字の場合に限って妥当すると言える。以上で(17b)を終わる。

尤も、上の(18)に例外が無いわけではない。(21)はいずれも例外である。特に(21b)(21c)の後部字音要素は2拍であるから、佐藤(1989:238)の記述(22)が妥当するようにも思える。

- (21) a. 不+得意(2型) = 不得意(2型)  
       b. 新+弟子(2型) = 新弟子(0型)  
       c. 興奮+気味(2型) = 興奮気味(0型)(注4)

(22) 「平板型と尾高型の二モーラ語は、後続して複合語を作る際、頭高型に変わることはないなどの制限はありそうである。」(佐藤1989:238)

しかし(22)の妥当性は、字音要素どうしの結合に対象を絞って考える限り、不明と言わざるを得ない。(22)を認めると(21b)(21c)には説明がつくが、(23)が説明できなくなる。(23)は、平板型・尾高型の2拍語が頭高型の後部字音要素となる例である。一方、(18)によれば(23)は全て正しく予

測できる。字音語に関する限り、(22)の採否は慎重な考慮を要する。以上で(17c)を終わる。(注5)

- (23) a. 助詞(平板型)      外科(平板型)      指揮(尾高型)  
 b. 格助詞(3型)      脳外科(3型)      総指揮(3型)  
      連体助詞(5型)      整形外科(5型)      陣頭指揮(5型)

(18)自体は新しいものではないが、後部字音要素が2字の場合に限り妥当するとした点が本節の新しさと言える。

[ 1.5. 後部字音要素が3字以上の場合 ]  
 本節での議論の流れは(24)に沿っている。

- (24) a. McCawley(1977)の記述の不備を指摘する。  
 b. 代替案として、(27)を提案する。  
 c. (27)以外の説明の難点を指摘する。  
 d. (27)と匂坂(1985:92)との異同について言及する。

まずMcCawley(1977)を検討してみよう。McCawley(1977:270-1)では、'long'という概念を用いた記述が展開されている。'long'とは、3拍以上であるか、彼の言う「漢語複合語(Sino-Japanese compound)」であることを指す(注6)。(ちなみにこれは、野村1972他の「長単位」とは別物である。)

McCawley(1977)によれば、後部要素が'long'である場合、結合結果のアクセント核は後部要素が決定する。そしてその内容は(25)にまとめられる。これは結局(18)と等しい。(McCawleyは和語も含めて論じているので、「前部字音要素」「後部字音要素」という用語は用いず、単に「前部要素」「後部要素」としておく。)(25a)の例を(26)に示す。

- (25) a. 後部要素が中高型なら、結合結果のアクセント核は後部要素のアクセント核と一致する。  
 b. それ以外(つまり後部要素が頭高型か尾高型か平板型)なら、結合結果のアクセント核は後部要素の第一拍上に来る。

- (26) a. 1型 金閣寺((注2)を参照)  
 2型 試乗会 指揮者 詐欺師 飛行機  
 3型 捜査網 展示会 感謝祭 選挙区  
      選挙区 天然色 責任者  
 4型 調達額 博物館 演歌歌手 軍需工場  
 5型 工業地帯 建設計画 天然温泉  
      民族移動 鉄道会社  
 b. 4型 大試乗会 大指揮者 大詐欺師 軽飛行機  
 5型 新生金閣寺 大捜査網 大展示会 大感謝祭  
      中選挙区 小選挙区 総天然色  
 6型 総調達額 大演歌歌手 大軍需工場  
 7型 大工業地帯 大建設計画 大天然温泉  
      大民族移動 大鉄道会社 最高責任者 私設博物館

しかし後部字音要素が3字以上の場合、(25)は妥当ではない。

3字以上の後部字音要素は必ず3拍以上になるから'long'である。従ってこれが例えば(27a)のように平板型なら(25b)によって、結合結果のアクセント核は後部字音要素の第一拍上に来る筈である。ところが実際は(27b)のように平板型となる。以上で(24a)を終わる。(注7)

- (27) a. 0型 銃撃戦 批評家 冒険家 政治家  
          展示場 顕微鏡 望遠鏡  
      b. 0型 大銃撃戦 大批評家 大冒険家 有名政治家  
          住宅展示場 電子顕微鏡 電波望遠鏡

(27)から、(28)が考えられる。

- (28) 後部字音要素が3字以上なら、結合結果のアクセント核は、後部字音要素のアクセント核上に来る。後部字音要素が平板型なら平板型になる。

このように、後部字音要素の字数は結合結果のアクセントにとり、極めて関与的である。また、1.3.で述べた御(ご)は、普通なら後部字音要素が3字以上の場合に成り立つ(27)を、後部字音要素が2字の場合にも成り立たせている点で、特別だということがわかる。以上で(24b)を終わる。

(27)の説明としては、(28)以外にも2通りの説明が(一見)考えられる。それらを順に示し、各々難点を指摘する。

まず、(27)に挙げた諸例の前部字音要素大・有名・住宅・電子・電波は、平板型の後部字音要素の字数を問わず、結合結果を平板型にするという説明を考えてみよう。しかしこれは妥当ではない。(29)の諸例は全て後部字音要素が平板型であるにもかかわらず、結合結果が平板型でないからである。(ちなみに(29)の諸例のアクセント型は本稿の(18)で説明できる。)

- (29) 大平原(3型) 大論文(3型) 大変革(3型)  
      電子郵便(4型) 電波妨害(4型)  
      有名歌手(5型) 住宅建築(5型)

また、(27b)の諸例の末尾の字音形態素戦・家・場・鏡が、結合結果を平板型にしているという説明を考えてみよう。しかしこれも妥当ではない。(30)の諸例は、末尾にこれらの字音形態素を持つにもかかわらず、結合結果は平板型でないからである。以上で(24c)を終わる。

- (30) 世界大戦(4型) 流行作家(5型)  
      証券市場(5型) 特殊眼鏡(4型)

匂坂(1985:92)は、「平板型の(長い-筆者注)複合語の前に単語が接続する場合」「平板化型の接尾辞を持つ複合名詞の前に名詞が接続する場合」に、結合結果は平板型になると指摘している。本稿の主張はこの匂坂(1985)の主張と似ているが、(31)の2点で異なる。以上で(24d)を終わる。

- ( 3 1 ) a. 匂坂 ( 1985 ) での「長い複合語」という用語を、「3 字以上」と置き換えている。  
 b. (26)のように、前部字音要素が名詞でなく大のようなものである場合も含めて扱っている。

[ 1 . 6 . 結合結果のアクセント型のまとめ ]

ここまでを簡単にまとめると(32)の表を得る。(但し例が少数に留まるものは省く。)

( 3 2 )

前部	後部	1字	2字	3字以上
1字		頭高型 平板型 後部第一拍	後部第一拍 保存	保存
2字以上		平板型 前部最終拍	後部第一拍 保存	保存

(32)の見方を説明する。

「前部」・「後部」とはそれぞれ前部字音要素・後部字音要素を指す。字音要素の結合は、「前部字音要素が1字か2字以上か」「後部字音要素が1字か2字か3字か」によって、実線で合計6つの領域に区分されている。

各領域に属する字音語には、その領域内に位置する記述のみが妥当している。

「頭高型」・「平板型」とは、結合結果がそれぞれ頭高型・平板型であることの記述である。

「後部第一拍」とは、結合結果のアクセント核が後部字音要素の第一拍上に来ることの記述である。

「前部最終拍」とは、結合結果のアクセント核が前部字音要素の最終拍上に来る(但し前部字音要素の最終拍がアクセント核を担い得ない、或いは担いにくい音であればその直前拍上に来る)ことの記述である。

「保存」とは、結合結果のアクセント核が、後部字音要素のアクセント核と一致することの記述である。この場合、後部字音要素にアクセント核が無ければ(つまり平板型なら)結合結果にもアクセント核は無い(つまり平板型である)。

(32)から(33)が理解される。以下(33a)(33b)について若干の補足を記す。

- ( 3 3 ) a. 「頭高型」は、字音語が短いほど妥当しやすくなる。

- b. 後部字音要素の字数が大きくなるほど、「保存」が妥当しやすくなる。

まず(33a)について。(32)からわかるとおり、頭高型は1字の字音要素どうしの結合結果、つまり2字字音語のアクセントについてしか妥当しない。更にその大体の内訳は(6b)(6c)のとおりであって、頭高型が妥当するには字数の点だけではなく拍数の点でも、結合結果が短いことが望ましいことがわかる。

次に(33b)について。「保存」という記述は上で説明したとおりであるから、これは結局前部字音要素との結合が、後部字音要素のアクセント核の有無や位置に影響を及ぼさないことだと言える。ところで、後述するresettingについて考えてみると、これもやはり後部字音要素のアクセント核の有無や位置に全く影響を及ぼさない。つまり「保存」とresettingは(34)のようにまとめられる。(注8)

- (34) 結合が後部字音要素のアクセント核の有無や位置に影響を及ぼさず、
- a. 前部字音要素のアクセント核の有無や位置にも影響を及ぼさない→resetting
  - b. 前部字音要素のアクセント核の有無や位置には影響を及ぼす→「保存」

後述するように、前部字音要素が接辞的な場合のresettingは、語基的な後部字音要素の字数が大きいくほど成立しやすい。(32)はこの種のresettingと「保存」との近接性を示唆するものと言える。

[ 2 . resettingの成立と字数 ]

0.2.で断ったとおり、本稿では、語中でresettingが成立することを認める。つまり、resettingが生じることと「語」であることは両立可能と考えておく。

Shibatani & Kageyama ( 1988 ) の「語」はlexicalなもの・syntacticなもの・post-syntacticなものに三分されており、post-syntacticなものがintonation breakを持つとされている。Shibatani & Kageyama ( 1988 ) の吟味は、GB理論における「モジュール」という概念と深く関わっており、本稿では立ち入らない。resettingの成立とintonation breakの生起という点で異なるが、本稿はShibatani & Kageyama ( 1988 ) とよく似た前提を持つとも言える。

以下resettingを、[ 前部字音要素の接辞的色彩が濃い場合 ] [ それ以外の場合 ] の2つに大別して考察する。前者は2.1.で、後者は2.2.で扱う。また本章では、語中でアクセントが高から低にかわる部分を「↓」で、逆に低から高にかわる部分を「↑」で表示することが有る。

[ 2 . 1 . 前部字音要素の接辞的色彩が濃い場合 ]

本節での議論の流れは、(35)に沿っている。

- ( 3 5 ) a. 前部字音要素の接辞的色彩が濃い場合に生じるresettingについて、(36)を主張する。  
b. resettingを生じさせる接辞的な前部字音要素を(39)にまとめる。  
c. 以上の結果を基に、匂坂(1985)に若干の言及を行う。

前部字音要素が接辞的な場合に生じるresettingについては、(36)が妥当する。ここでは(36a)(36b)、特に(36b)を主張するところが新しい。以下、(36)を説明する。

- ( 3 6 ) resettingが起きるか起きないかは、原則的に次の(a)(b)(c)が決定する。  
a. 前部字音要素が何であるか。  
b. 後部字音要素の字数が何字か(字数が大きいほどresettingしやすい)。  
c. 結合結果が語彙化しているかどうか。

例えば前部字音要素が全の場合を考えてみよう。(37a)(37b)(37c)では例えばゼ↓ンコ↑ウキョウダ↓ンタイ・ゼ↓ンシヨ↑ウヒ↓シャ・ゼ↓ンジヨ↑シユのように、全と後部字音要素の境界でresettingが成立し得る。一方(37d)では例えばゼ↓ンカであってゼ↓ン↑カとはならず、resettingは成立し得ない。

( 3 7 )

- a. 全公共団体 全鉄道会社 全重要課題 全競技種目 全契約規定  
b. 全消費者 全放送局 全視聴者 全生産量 全警備員 全展示物  
c. 全助手 全課題 全科目 全放送 全社員 全政党 全試合 全地域  
d. 全科 全社 全党 全員 全快 全胜 全曲 全学 全校 全長

このように前部字音要素が全の場合、後部字音要素が2字以上の場合はresettingが成立し得るが、後部字音要素が1字の場合はresettingは成立し得ない。

念のために言うと、全助手・全捕手にresettingが成立し全国・全党に成立しないように、後部字音要素の拍数・音節数はresettingの成立如何に不関与である。以上が(36b)の趣旨である。(なお、例えば全国区にはresettingが成立しないが、これは全/国区という2要素の結合ではなく全国/区という2要素の結合によるものであるから、ここでの記述の例外にならないことを念のために記しておく。)

尤も、(38)のゼ↑ンジ↓ドウ・ゼ↑ンセ↓カイのように(完全に、或いは半ば)語彙化しているものは、resettingが(常に、或いは時には)生じない。これが(36c)の趣旨である。

### (38) 全自動(の洗濯機) 全世界

以上からもわかるように前部字音要素が全の場合、結合結果が語彙化していない限り、後部字音要素が2字以上ならresettingが成立し、1字ならresettingは成立しないとまとめられる(注9)。このような前部字音要素としては全の他に、各・前・対・脱・某・当・現・旧・超・反・純・(determiner-likeな)同・(determiner-likeな)本・(determiner-likeな)両等有る(注1)(注10)。

しかし、resettingが成立する接辞的な前部字音要素が、全て全と同様になるわけではない。

前部字音要素が第の場合、結合結果が語彙化していない限り、後部字音要素が1字であってもresettingは成立する。

前部字音要素が遠・非等の場合、結合結果が語彙化していない限り、後部字音要素が3字以上ならresettingが成立し、2字以下ならresettingは成立しない。

つまり、これらの前部字音要素は、(36b)の点で全とは違った振舞いをすることになる。従ってresettingの成立如何を正しく予測するには、個々の前部字音要素が全のようなグループに属すのか、第のようなグループに属すのか、遠のようなグループに属すのかを知っておかねばならない。これが(36a)の趣旨である。以上で(35a)を終わる。

以上に挙げた様々な前部字音要素を、例を付して(39)にまとめる。(39)中の「vs.」は、resettingの成立・不成立の相違を表す。「vs.」より左側の例ではresettingが(語彙化していない限り)成立し、右側の例では成立しない。

尤も、(39a)(39b)(39c)いずれのグループに属するのかがはっきりしない接辞的前部字音要素も若干有るので、それらを紹介しておく。(これらは(39d)とした。)

前部字音要素が故であって結合結果が語彙化していない時、後部字音要素が3字以上ならresettingは成立する。後部字音要素が1字ならresettingは成立しない。しかし後部字音要素が2字の場合の語例が見つからず、帰属グループの決め手に欠ける。

前部字音要素が(determiner-likeな)今であって結合結果が語彙化していない時、後部字音要素が2字以上ならresettingが成立し1字なら成立しないかと思われるが、語例が少なくはっきりしない。

前部字音要素が、何らかの時間数を表すものに前接する過去であって、結合結果が語彙化していない時、後部字音要素が2字以上ならresettingが成立する。が、後部字音要素が1字の場合の語例が見あたらず、帰属グループの決め手に欠ける。

前部字音要素が汎や環の場合、汎太平洋・環太平洋のようにresettingが成立する語例が有るが、語例が少なくはっきりしない。

( 39 )

- a . 後部字音要素が1字でもresettingが成立  
 第千百番 第千冊 第千番 第百番 第千 第百
- b . 後部字音要素が2字以上で初めてresettingが成立  
 全公共団体 全消費者 全助手 全課題 vs. 全科 全社 全党  
 各宗教法人 各得票数 各講師 各法人 vs. 各局 各者 各氏  
 前総理大臣 前支部長 前校長 前国会 vs. 前列 前者 前回  
 対先進諸国 対先進国 対外国 対国家 vs. 対案 対戦 対決  
 脱構造主義 脱貧農国 脱貧困 脱公害 vs. 脱皮 脱稿 脱獄  
 某政治団体 某歯科医 某職員 某歌手 vs. 某氏 某所 某局  
 当選挙委員 当製作所 当会社 当役員 vs. 当節 当所 当局  
 現総理大臣 現評議会 現国道 現時点 vs. 現状 現況 現在  
 旧市民病院 旧県議会 旧国道 旧県道 vs. 旧法 旧態 旧姓  
 超秘密主義 超現実的 超過密 超低速 vs. 超人 超過 超越  
 反帝国主義 反社会的 反体制 反共産 vs. 反論 反対 反戦  
 純自然食品 純植物性 純国産 純天然 vs. 純粹 純潔 純化  
 同選挙委員 同製作所 同社屋 同役員 vs. 同所 同時 同国  
 本弁論大会 本討論会 本製品 本登記 vs. 本節 本書 本局  
 両選挙委員 両討論会 両首脳 両次官 vs. 両者 両国 両所
- c . 後部字音要素が3字以上で初めてresettingが成立  
 遠赤外線 vs. 遠距離 遠近 遠隔 遠足  
 非合目的 非人道的 vs. 非常識 非合法 非番 非情 非行
- d . 不明  
 故斉藤総理 故斉藤氏 vs. 故人 故郷 故山  
 今大会 vs. 今期 今晚 今度  
 過去数世紀 過去数年  
 汎太平洋  
 環太平洋

(39)は、筆者の知り得る限りの先行研究においてこれまで指摘されてきた前部字音要素を全て含み、且つそれ以外のものも含んでいるが、完全に網羅的と主張するつもりは無い。

また、このように後部字音要素の字数によってresettingを成立させたりさせなかったりする前部字音要素は、かなり限られており、特定が十分可能と考えられる。一般に、字音要素が語基的か接辞的かは即断できない部分が有り (cf. 野村1987)、本節で用いた「接辞的」という概念も漠然の感を免れ得ない。しかし(39)のような要素を特定していくことにより、「接辞」定義の問題は実質的にクリアできると思われる。以上で(35b)を終わる。

最後にここまでの結果をふまえて、匂坂(1985)について、簡単に言及する。



- (40) a. 対 / 外国政策  
b. 対外国 / 政策

- (41) a. 反 / 自由貿易主義  
b. 反自由貿易 / 主義

- (42) a. 反 / 主流派  
b. 反主流 / 派

(40a)だけでなく(40b)の構造においても、対外国政策はタ↓イガ↑イコ  
クセ↓イサクのように、対と外国政策の境界でresettingを成立させ得、外  
国と政策の境界ではresettingを成立させ得ない。(41)も(40)と同様で、  
(41a)だけでなく(41b)の構造においても、反自由貿易主義は反と自由貿易  
主義の境界でresettingを成立させ得、貿易と主義の境界ではresettingを  
成立させ得ない。(42)も同様で、(42a)だけでなく(42b)の構造において  
も、反主流派は反と主流派の境界でresettingを成立させ得、主流と派の境  
界ではresettingを成立させ得ない。

句坂(1985:89)では、長い複合語のアクセントについて、(43)が指摘さ  
れている。

- (43) a. 原則的に、構造上尤も深い切れ目が発話区分境界となる。  
b. (43a)の例外は、構造上の切れ目により最終単語が孤立する  
のを避ける場合に限られる。

ここで(43b)中の「最終単語」を明確にしておく。句坂(1985)において  
は、「複合語」とは自立語+自立語だけでなく自立語+接尾辞も含むこ  
と、但し接頭辞+自立語は「複合語」でないこと、「複合単語」とは「複  
合語」に等しいこと、「単語」には自立語だけでなく接辞も含まれるこ  
と、「単語」は「複合語」を含む概念ではないこと、等が伺える(cf. 句  
坂1985:60,62,64,76,91,92)。

すると(40)~(42)の政策・主義・派は「単語」であって「複合語」では  
ないことになるから、(40)~(42)は(43)で説明可能となるだが、では(44)  
はどうだろうか。

- (44) 超高級 / 銅線

(44)の構造を持つにもかかわらず、超高級銅線はチョ↓ウコ↑ウキユウ  
ド↓ウセンのように、超と高級の境界でresettingを成立させ、高級と銅線  
の境界ではresettingを成立させ得ない。これを(43)から説明しようとする  
れば、銅線が「単語」だと言わざるを得ず、「単語」と「複合語」との境界  
が漠然とせざるを得ない(銅も線も自立語である)。

こと字音語に関する限り、「最終単語」の代わりに「最終の、しかも2  
字以下の字音要素」としておけば問題は解消すると思われる。

## [ 2.2. それ以外の場合 ]

本節では、窪園(1987)の紹介とその言及を行うことになる。本節での  
resettingの成否に関与的な要因は、「前部字音要素と後部字音要素の関  
係」及び「語彙化」の2つである。

- ( 4 5 ) a. 機械操作のゴジラ  
 b. 機械操作の際には、次の手順を踏んで下さい。

(45a)の機械操作は機械と操作の境界にresettingが成立し得ないが、(45b)の機械操作はキ↓カイ↑ソ↓ウサ・キ↑カイン↓ウサのように、resettingが成立してもしなくてもよい。resettingが成立すれば、機械は1型、操作も1型であるから、アクセントの谷が現れることになる。

窪園(1987:35-6,58-9)はアクセントの谷が生起する場合として(46)の7パターンを挙げている。これはresettingが成立し得るパターンと解釈できる。(45b)は(46a)の[目的語+動詞]に属することになる((45b)につきresettingが成立しなくてもよいことについては後述)。(注11)

- ( 4 6 ) a. 格関係  
           主語+動詞……………選手宣誓  
           主語+形容(動)詞……………意識不明  
           目的語+動詞……………自信喪失  
 b. 同格関係  
           同義……………拍手喝采  
           同位……………公平中立  
           反意……………保守革新  
 c. 人名(姓+名)……………須藤耕作  
 d. 組織名+役職名等……………政府要人  
 e. 氏名+地位・(役)職名……………加藤教授  
 f. 順番を表す名詞+地位・役職名……………初代会長  
 g. 地域名+地域をさらに指定する名詞……………近畿南部

(46)に対して本稿では(47)を提案したい。

- ( 4 7 ) a. (46a)のような統語レベルでの分類よりも、表層の格形と深層格による分類の方が望ましい。  
 b. (46)以外にも、resettingが成立し得るパターンが有る。  
 c. 窪園(1987)で例外とされているものの少なくとも一部は語彙化で処理できる。

まず(47a)について。(46a)よりも(48)の方が望ましいと思われる。

- ( 4 8 ) 前部字音要素が後部字音要素に対して、  
 a. ガ格の関係に立つ……………選手宣誓 意識不明 芥川賞授賞作家作  
 b. ヲ格の関係に立つ……………自信喪失 (49a)(49b)  
 c. ニ格で、Goal・Locative・Timeの関係に立つ……………(49c)~(49e)

- ( 4 9 ) a. 当駅通過(は5時40分になる予定です。)  
 b. 刑務所脱走 日本脱出 裁判欠席 大学院卒業  
    京都発(は5時40分になる予定です。)  
 c. 当駅到着(は5時40分になる予定です。)  
 d. 都内在住 図書館所在 大使館勤務 新年号所収  
    合衆国滞在(の折にはお世話になりました。)

e. 近日上映 平成元年卒 平成元年没

(49a)は前部字音要素が後部字音要素に対してPath、(49b)はSource、(49c)はGoal、(49d)はLocative、(49e)はTimeの意味役割を持っている場合の例である。(49a)(49b)を(46a)の「目的語+動詞」に収めようとする、移動補語も目的語になるということになる。この点については、杉本(1986:288)等の反論が有るとだけ記しておく。仮に移動補語が目的語であるとしても、(49d)(49e)の前部字音要素は「目的語」とは考えにくいのではないか。(注12)

次に(47b)について。(46)以外にも、(50)に挙げるようなパターンが有る。(窪園1987:54は「これ以外にも(中略)加えるべきものがあるかも知れない」としており、(47b)はこの意味で窪園1987の補足とあって良い。但し、(50)が(46)の補足として網羅的かどうか、例えば文学研究家等(50)に挙げるべきかどうかの判断は、本稿では保留する。)(注13)

(50)

- a. 役職名+氏名……………捕手斉藤(がこれを一塁へ悪送球。)
- b. 場所や時間+順番や評価……………本邦初 今世紀最悪(の惨事)
- c. 要+2字以上の動詞性語基……………要検討
- d. 何らかの属性の所有者+独特/特有/専用  
……………西洋人独特 西洋人特有 社長専用
- e. 場所+名産……………東洋名産

最後に(47c)について。(46)の分類の後で窪園(1987)は、文化交流等の例外がかなり有るとしているが、例えば(51)のような場合、プ↓ンカコ↑ウリュウのようにアクセントの谷が生起する(従ってresettingが成立する)ことも可能である。

(51) 更に翌年、ペリーが黒船に乗って日本を訪れ、ここに両国間の文化交流の幕が切って落とされたのである。

これらは結局、語彙化がresettingの成立を妨害していると考えられるのではないか。先の(45b)機械操作についてresettingが成立してもしなくても構わないのは、語彙化が任意的だからと考えられる。

しかしながら、(46c)(46e)(50a)(50b)(50c)(50d)のような諸タイプは、常にresettingを成立させるようである。この説明として、「これらのタイプは語彙化しない」とするのは、疑問と言わざるを得ない。この点は今後の課題と言える。

### 3. まとめ

現代日本語の語彙とアクセントを考える時、語数・生産力ともに豊富な字音語は看過できない。本稿は合成的字音語を集中的に考察した。

本稿の中心的主張は(52)にまとめられる。

- (52) a. 結合結果のアクセント型を記述するには、字数情報が有用である。  
b. 前部字音要素が接辞的な場合のresettingの成否にも、後部字音要素の字数が関与する。

本稿が焦点を当てた「字数」については、特に短い字音語の場合、結合回数との対応が見られるようである。が、詳細はいまだつかめておらず、今後の課題としたい。

また本稿では(52)以外にも、(53)の2点において、特に新しい展開を見た。

- (53) a. 2字の字音語のアクセント型について、原則と規則の設定により、相当数の語例の予測を可能としたこと。  
b. 前部字音要素が接辞的でない場合のresettingについて、従来指摘されなかったパターンを指摘したこと。

★(7)について

本論中の(7)について、以下に詳細を記す。

まず検索資料として金田一他(1989)を選択した理由を(54)に記す。

- (54) a. 記載されているほとんどの2字字音語に対して、東京方言のアクセントが記載されている。  
b. 上の(a)を満たすものの中で、筆者が利用できる最新の資料である。

検索対象については、(55)に記した判断を前提とした。

- (55) a. 見出し語でないもの(例、老犬)も検索対象とする。  
b. 見出し語については、見出しに漢字が記載されていないもの(例、海苔)は、検索対象としない。  
c. アクセント型が記載されていなければ検索対象としない。「造語」「造語形」「接尾語的」等とされており(例、未満露天 内国 以後)アクセント型が記載されていないものは、検索対象としない。また特に理由が明示されていなくとも、アクセント型が記載されていなければ(例、俊獵)検索対象としない。  
d. 固有名詞(例、英国)は検索対象とする。  
e. 零から十までの数詞を含むもの(例、一匹)は検索対象としない。

検索は、(56)に記した方法によった。

- (56) a. 複数のアクセント型が記載されているもの(例、探知→1型・0型)は、最も優先的なアクセント型として記載されているものただ一つ(探知の場合は1型)だけを見る。  
b. 同一項目におさめられていても、語義によりアクセントが異なると記載されているものは、各語義ごとに1語と認める。(例えば鉄火という語は5語有り、そのうち2語が1型で3語が0型とする。)  
c. 同一項目におさめられていても、語義により字が異なるものは、各字ごとに1語と認める。(例えば愛機と愛器はそれぞれ1語とする。)  
d. 同一項目におさめられており、何通りかの字が記載されているものは、上の(c)に該当しなければ併せて一語とする。(例、冥途 冥土)

筆者は(55)(56)に記した検索方式に固執するつもりはなく、また(55c)に記した事情もあって、(7)に記した結果が絶対的なものとは考えていない。本論でも述べたとおり、この検索結果はあくまで参考として提示したものである。ただ、(55)(56)と異なる検索方式を採ったにせよ、(7)はさほど変動しないと思われる。

以下、特に(7b)(7c)(7d)について、具体的に(57a)(57b)(57c)に記す(印刷の都合上漢字が使えず、やむなくカタカナで表記した部分も有る。本来の漢字は金田一他(1989)で確認されたい)。

( 5 7 )

a. 後部  
0 型

素哀暗印陰映塩応開會画楽漢看緩灸経共金禁公計輕結健献減原交降鉞酷悟細最搾雜慘式漆実弱重出抄置  
要車馬酒画字語死凶客学換間漢窮狂教近銀寓刑経欠下檢原口合香国牛在在作作産色湿失借重出出女冗

が話譜紙画写化射始費地器語守和治師和金地書家時油果胃詞車話差車油似性工多油誌死辞器費化油家土書語  
1 拍娜摩字氣写期手死罪地字詞腫語耳視和字子示示油句嘩字酒語座射羅死旗家布洲種次字記布婆賀庫馬華佐

…総数6038 1 型4699  
悪暗韻隱英遠応開外学活漢漢逆急凝局銀訓揭外科句化辞種語座首話摩符庫譜家書椒書子父魔語語費化座  
拍娜摩字氣写期手死罪地字詞腫語耳視和字子示示油句嘩字酒語座射羅死旗家布洲種次字記布婆賀庫馬華佐

化喻字居書写募示皮費写詩書比所視紙地子辞示科揭外科句化辞種語座首話摩符庫譜家書椒書子父魔語語費化座  
死種書語詩座鵝外回楽滑監罐花急行曲近禁鞞繫劇決原顯原紅孔子受話麻路字府過多所話写話利詞語府夏座

死種書語詩座鵝外回楽滑監罐花急行曲近禁鞞繫劇決原顯原紅孔子受話麻路字府過多所話写話利詞語府夏座  
行医逸鬱液遠音会外隔合諫換休給香禁金金訓傾劇欠拳幻原紅格子公講極根在採雜雜産自実自酒祝術述生常

火者史氣化視義社野離致止地暇費車句主利話斜画字固視凶黛子凶話秘氣社油貨費婆首車費落辞後部姜座  
反安椅逸運腋艶諧外会学月諫肝急求行銀菌謹経芸劇月原原檢絞公構講告今材作札参散紫実积臭熟出春正燒

例1339 (以下に記す)  
暗隱乙運腋衍外害画画割環換休休教授近筋空景系夏月諺原献合柑紅国後金罪作殺産分失失借集縮出馴庄小

記諭夜指芽字画者架期賦視喻止符教授腫地氣凶至謝語詩茶意子茶語家字種詞氣科肢火地字荷写資化几字  
座噓話語肥脂氣所家氣価字話死儀授止酒費句馬種所死資譜化磁碑示酒和書詩記家詞科地視辞凶社視棋子

暗隱乙運腋衍外害画画割環換休休教授近筋空景系夏月諺原献合柑紅国後金罪作殺産分失失借集縮出馴庄小  
安引逸英液膳海会画客換漢官急行教禁禁空警競下闕檢減原硬硬口告御混細作雜産宋実湿弱修縮出巡将障

示譜火詩多化語書語氣科者話使死書似習輪語馬駄賦視氏簿化資付辞須話初字居化語家地地字良所死扱情  
暗印引詠穢欧外楷客語活眼患閑急狂行近近空敬桂下月檢源原膠合交告吳懇最作雜酸識実実借習儒出殉証情

示譜火詩多化語書語氣科者話使死書似習輪語馬駄賦視氏簿化資付辞須話初字居化語家地地字良所死扱情  
暗印引詠穢欧外楷客語活眼患閑急狂行近近空敬桂下月檢源原膠合交告吳懇最作雜酸識実実借習儒出殉証情

暗印引詠穢欧外楷客語活眼患閑急狂行近近空敬桂下月檢源原膠合交告吳懇最作雜酸識実実借習儒出殉証情  
暗印引詠穢欧外楷客語活眼患閑急狂行近近空敬桂下月檢源原膠合交告吳懇最作雜酸識実実借習儒出殉証情

暗印引詠穢欧外楷客語活眼患閑急狂行近近空敬桂下月檢源原膠合交告吳懇最作雜酸識実実借習儒出殉証情  
暗印引詠穢欧外楷客語活眼患閑急狂行近近空敬桂下月檢源原膠合交告吳懇最作雜酸識実実借習儒出殉証情

暗印引詠穢欧外楷客語活眼患閑急狂行近近空敬桂下月檢源原膠合交告吳懇最作雜酸識実実借習儒出殉証情  
暗印引詠穢欧外楷客語活眼患閑急狂行近近空敬桂下月檢源原膠合交告吳懇最作雜酸識実実借習儒出殉証情

馬事詞子所腫画止地斧者驅話牙書画火詞署話化地座過語句語示器記写付化義紙詩置異味飛野芽化府書置止布死  
 乘食助伸陣水聖靜整石拙先禪象草俗耐台代对炭团中超勅追通呈鉄伝添糖同唐童倒特毒突内肉乳入念配廢配爆  
 知後字語事靴糸凶次辞氣癒氣酒和紙書理羽箭中調調追通丁鉄転転等動凍動投都毒突内南入入捻納配配白  
 承食書新炊製製製席接疝全送造総損台代丹箏中調調追通鉄電篆点透動投同同道毒咄内難日入年能俳培白  
 淨書話油氣所車話紙凶語家画負画車話氣座酒費磨書氣和簿加過視火荷字茶過機資視趣話酒嗟示破語費貢書誌地紙  
 淨情食人寢水寸製星隻絶線先総増挿俗台大貸達探中中帳追通諦鉄電篆点透動投同同道毒咄内難日入年能俳培白  
 書和味手書死禰座書画句話茶価車話記座車比皮種荷油馬守肥止火化示地下画座辞種話殊起規派射所期化語置芽  
 上唱食助新水宿靜清席絶説煎増操造速退台对脱断着注跳鎮追停鉄電展転投童動答同童特突内軟日入年濃廢配配麦  
 書話皮事種氣世座酒油句庇子加資履歌座社地字車火途者火儼止死科字画衣画坐時車油写過科字誌手季慮句他顏  
 詔笑植叙人水宿星清製節雪扇増増草俗对退台脱单着中長鎮追底溺転点点胴動同等同桐特読内難日入年念俳排破  
 証小食費字珠瓜字座治油器置車花除油化佐緒置脂詩地車辞下朱座芽加翅書意化座治写油字化地語日記忌利氣所屋  
 酒油樹民酒和詞語磁油禍地死画辞譜書鼓字地化座語射子喻地価置火差書位画座辞写母自志子語課座氣油化書離  
 上醬植庶新親數成青聖赤接戰装送総俗太題代脱单逐注丁直築定定点点篆同陶当悼透同独同緞喃日入熱燃倍俳背  
 淨丈職織新神話和後字喻化馱座画相似置字議字置衣語話視子射死地下夜狗書話鉄語至射腐死地所画舞庫氣譜画車理  
 車菘字器字譜肥句肢暮辞酒後荷子書死画詞豆地家味死子写試話字稚句手離画句視社避語和挫化池漁和賦芽車油  
 乘生植食新新水成整歲世節戰装莊蔵即題題大宅檀淡忠銚直追通綴丁転転電唐投透当逃独頓軟肉入柔年胚配配廢  
 字費餌詞地茶書臥枝茶油写句違語書語価詩子酒化那止座字語知示字居車馬芽居詩時婆蛾話羅下腫居部費賀辞味  
 疊消食序苾新水靜整製石接選相造叢俗代題台濁淡旦中長植对通提綴転電伝冬同唐同塔毒独銅南肉入入燃拌排俳



揮馬射須子意詞画字話地紙座座函起氣座書所死紙語所要落乱略綠累例聯老 杞色素珠祉 返事

發發反必拍不副仏分文平別便法方發本末密名悶油要落乱略綠累例聯老 義揮寄使 道理

芽度示需後種座佃死離射個梓語書歌碑度使酒怪和語書語書茶地句句聲 義指數副 道理

發法判必病品複物憤分平別別法奉牧墓每密名勿融洋洋落蘭略綠臨例連盲 義揮寄使 道理

火地語寫語死沙施家利死家類語珠画主僧画酒秘和語種伍酒綬地子化車後 氣味期難查 道具

發發蛮筆標瀕袱布分分斃別別邦宝北法壳密銘默宥用洋落乱略綠綸靈列老 氣味期難查 道具

荷兌語至語詞臥事課布書居派火射和子次陀示馬起氣酒車射字種書比死下語味氣自位炉分 反例2402 (以下に記す)

薄發反必評品伏無分分米別別防放飽弘每弥明木躍陽洋来乱略良臨類轆廊論氣士出復風大 案尉以因威羽雨運

話射画死具風諭喪火地止儀途画死話書時酒辞次筆画子示視語治写書历史化轆吉昨夜夜味呂事 亞異医術族藥元宙勢

白發版必表屏諷服噴分閉別別邦暴法没每神名目訳陽楊来乱略療臨類歴老轆吉昨夜夜味呂事 亞異医術族藥元宙勢

利車話記氣写皮署和署鎖記置課子腐主譜座詞示種画事紙語画置時似話署画知具呼度茶手儀 亞聖学識内欲外内州

薄發發筆病描封副仏分閉別別放帽防法本滿名默葉洋用礼蘭略留臨類例連録既索指百普上礼 亞聖学識内欲外内州

離齒喪車記死書手座所語画墅火糸舞作地画刺子者家字日叭派頭擒字書子話地塵魔意持味味 齷齪以委医医院雨雨

剥拔發飛表病封副仏分米壁別放防邦發盆漫名孟役養用曜喇立竜林類隸樞朗危莫色得扶酸藥 齷齪以委医医院雨雨

破糸布茶画示刺射語書語話書秘止富華字書話字詞花子稚下地化画語書座費車仮部恵利味所総数21399 齷齪以委医医院雨雨

爆拔發番描標諷輻仏焚平語話書秘止富華字書話字詞花子稚下地化画語書座費車仮部恵利味所総数21399 齷齪以委医医院雨雨

痴子被所布示鎖写具社氣和種種示負句字社後簿語化紙画馬地記論句酒語死卦娑披話土義儀 2拍…挨委遺意衣異迂雲

白末法番被表封複仏分平平別變杓抱發本末明名訳沃洋要落陸略理類冷連牢有袈直世覆恩名が阿医意見族料衣服水腕

車語破書致紙化地婦射画野視死事美起語子荷途徒易紙子駝士譜費化示華視伽我徹話茶想所要星域願前石類舷翼

拍跋發板筆表風服復噴米平蔑變法褒勃梵末茗冥門容用椽駱力略旅類靈蓮老闊怪式世福愛便音阿異依以隕異右羽

2 型

3 型

b. 後部字  
1 型



日揚陸心限學般日人段道報竈爵疇病行間僅限術能金骨實麗中域別屬線構閱帥麥人外世內物力學國人代腹流難  
 緣鷹海改界雅各佳華下華果画官官看費期飢期技機給胸虛奇禁区區軍野結玄元原胡構後口好光語胡古古鼓古困  
 長柄惡心力學通軸人俗線法略西中白国樂害原述難教角国量代類難曹線構外人內祿外積点白力樂国色族風來胆  
 園橫害回外画各花家雅割加下関眼関貴伎危起既危旧仰拳器近菌苦軍經結圈劍圈元校講交黃効古故古語古古魂  
 髓風中釈名學層山信族公砲欲骨石年力樂業元術內汲用月類属力德勞石色益山道力外爵賃白料學幸生俗飯節  
 延橫華解戒歌各火家華郭火我顛岩元眼器機紀奇畿汲器去魚金筋功苦珪景權劍劍權郊侯工紅稿古御後古御願今  
 雀生南錯抱學人財臣族界兵門公籍念來會業劇塾殿妙料業柳錢力患力濟法來在点米海爵直薄料角光舟膳日物夕  
 燕往華介介家各家家家各寡家管漢觀元議企喜義貴奇給漁御金金苦功経刑家現原玄航公交厚香鼓後孤御後御今  
 得州北骨分學鶴谷殖船鳥幣物月性忍本緣官芸日茶望落億物世來間樂骨阪男今疇法悔山中伯報外曲日前道木性  
 會奧華骸灰科孤河貨河花貨寒感堪元機技技期喫既及巨御近近区苦頸京下現鼎減後鉞講侯公戸古後午悟枯根  
 积州州軍念學員号職川中風面金靜內本運願芸式長方來練物山辺學養骨罰心骨紬法乙山中年法越形實性桐木雜  
 會歐加海概化各雅家河渦家画元閑管刊機析伎儀議貴旧教御銀近苦供頸刑決顛繭憲甲高口光公吳御故個梧古混  
 食豆点育毒害曲甲商線中般名音水東本運関兄材長分道椎年山分州物州能算月代法州山代軟法論鄉式制殿坊現  
 餌碗温化害禍歌華華火家過家漢加関官氣機貴機機氣弓胸去金金隅供芸芸決弦現拳江坑後硬工抗故古古御御權  
 式幕声行棠街業言日節中伯慢炎色点方院官君財台物長中族骨品役面練當裁君隊法水行線內弁論京山人長文錄魄  
 会煙音戒海花家嘉過佳火画我肝顏觀漢議器貴器偽級胸魚筋金苦工訓芸決嚴原劍江孝交校抗口故故吾伍古語魂  
 向分樂教腸音僑劇日正檀內法腕職長報員翰金材賊物中弟声炎年力民代椎齋校属兵兵業勢內兵列弓今人蝶物陵年  
 回鉛音回回訛華歌夏賀歌家家下官管官議貴寄器義器官兄去筋近偶区郡頸潔檢眷憲甲鉞豪構工後胡古個胡個御今  
 舍分尚外內屋鄉兄夷清壇道宝竈省長弁州官官金公族能屈弱世論肉陸方隊內濟教勢品業業生內物琳旧刻人長物料日  
 馱塩和海海家家雅果河花歌家隊官貫勘紀貫基貴貴技窮強拳議筋空公軍境決頭權現梧工後坑鉞光故後故戸古御今

月別菊類回官源今美匠稅族团弟南分民員中力心法學稅物關葉校世店念兵屋豪糖本糧旧酌心体念命狂練州濁力灰  
歲差殘酸次史資自塾師市氏師子指士士社社車執州儒酒腫春次將上商正將書諸諸資親斟信人信身醉水勢清勢石  
君道學藥街官劇刻實術性族檀長難仏末門術欲身念練人木月掾業生点人兵王侯相法料旧實身代年抱液力液代來開  
細茶產散市仕詩時史施資士紫次至持始寺射邪修執習主樹閩大商小商哨諸諸除資新真心身新辛膝推精聖生切  
惡長海本外官劇極式宗生息代長内物妹目慳門職内練術別月掾官進腸人仏類公說法料炎實食退道捧類力州俗洋代  
罪薩山殘市士史至司時死子次師寺事姉耳邪沙住週修呪種旬少小精小上成生諸諸試賢信寢進神心人水駿聖西世  
州今州砲苑學局号產宗井僧退長内服法面曲面術道類物菊狀外食代内品來賢節分料郎山職体底變力陸寸統名帶  
佐昨參山紫詩時次死自市師辭市地時司地邪斜柔獸手呪春御場少城場商上諸諸処史次深神神心神神盡水寸正姓世  
長暮腕内恩學業号產住藥節態序内表變面業刃從長類從肉益學州職代内罰來芸籍般立練国色体朝刃力葉尺精命代  
座歲左山師斯事寺資止雌時事市市次事誌社斜主酋醜主酒純初常小上省賞將諸書諸私試神神身清身人水寸精生世  
中物翼中運學業項材終髓設代丁童範片面監別言愁力君道腕員州条代道柏欲兄生罰立力月上族中平力兵腦神分尊  
座財左山時視斯事資始齒施誌仕兒師紙紙舍差祝絨重主儒手諸城条昭成松情諸諸処市磁新身親陣甚神水頭精成世  
術判用段運學教号財石人節孫序道背幣命外般月大力業段練員州將待天壳輔君勢人蘭力兄術俗中兵力分蓋山物人  
詐裁作算寺私司謚私磁時使兒支斯紙紙使社這秋重衆授手手署上少招聖商少諸諸紫資仁仁真心新心隨頭青靜世  
細中右水院學客号罪爵身尺孫中堂配分命会内教俗落教属種類員涯少体長腦藥曲式道來力經術切且物力分匹根物間  
些最左山寺志次師死子自咫子寺祠支時死社社宗習集儒種種所生少正場樟生序諸諸爾視神鍼親震人人水数精生世  
眩促法月案學官限債日色籍卒中道念分名屋骨雄生來教足類惡害国東序念法行冊道流力教術生胆仏葉線体音伐界  
左催作殘私史次時市時辭史士死師思時氏社尺雌終從主手酒諸生相裝省情乘諸諸書書庶死新心人心神新垂囟清征世  
業產刃金愛害願件祭實象世速談弟男文民翁中友水砲官儒生力序液国石点年法學国島物料教州世代罰訊晶蓮音敗力  
作財左殘自自志事司事時時示師次斯市沙車師秋重儒儒呪後漿生硝焦生商諸諸書書飼信神入神神新水睡正成精

点州山町表列術動統服料山毒用郎段略性勇州調力骨刃籍力局歲孃世人流世立光道傷中法博国中国願哀点景易行  
 接泉全全前前槍駮統粗損大胎体太段肝知知張長聽椎底典電當當同當當渡都日入刃年農理万藩比悲微氷風不奉  
 待学骨長般類産点類賊落公腸陽夫石複世道州長力錢寧性領教今条場道當都奴尼乳人年腦医藩判美美氷府武武  
 接全薦船先蘇早争藻鼠村乃大太太胆单治茶長町張賃丁天天道當同道當都都尼乳人年腦医藩判美美氷府武武  
 僧回国段舶力港長力相得閣代紋輔整判日略短來金内職末館骨章品頭洋政木北癌術心中州月代力害俗用乏雲樂  
 拙前全全船戰桑総総粗損太代大大端談遲地中長朝賃廷天顛當頭同同到東都土南乳忍熱囊伯半万蛮被美費貧浮舞  
 線液項代年兩曲長力宗長公積門分正白識方日村宝金点竺幕学骨術表点方胸腹産液法法中伯徑族物運賊鎗相運岳  
 接染前前千千等曹走祖村大体大多端蛋知地中町重賃定天天同橈道同誦當度屠難乳如忍腦河半蛮万悲匪秘貧不富  
 線惡校村熱柳外朝料先体言臣枚姓誠泊行物毒石半力中骨罰会国住年中弁論内山中房人髓買金錢般運属目性力外  
 折善全全潜川窓宋送祖尊体大大他丹淡知地中長丁地泥天天同當同道答討都南日女人腦壳板半万非卑眉稟風部  
 政論香世人略州俗麵稅属官尽病日爵念学能点江罰力力国道音梟日町代分類毒閣米ハ冬業毒金生人後石服性流王  
 撰世線前千前相僧素租尊代大大他男丹地知中長懲知通天唐當同同當糖糖蠶内日鏡忍農梅半半犯備砒被品風父  
 生物件職道藥術束法織公外小罰国溪毒育点世覺男略訊涯堂院月枝店俗腹力督外仏石体学啓官神東中人男露物王  
 殺施前前全煎相裝相組尊体大体他端丹知地中聽長知通天當同同當道當動都内日尿人農梓判阪坂備美美披風夫  
 州道月生島藥宗族方国兄温将自郷音点域遲国音内突弁外道案月山町船番領庁着独麴耐來力賊盛店前術難恋体縁  
 撰世前全全仙儒宗双祖尊体大太他短端地遲中長町猪通天同當銅當同當頭都頓日入忍年腦馬繁飯備美避悲風不  
 闕片月章湯兵音正念絹益液借内雲州鉄鍊代学炎点練念線中州君山庁節年梁俗力欧棒相膜力術疊長州術難料俗鉞  
 撰切先全全錢尖宋僧想素損体貸胎朶淡鍛鍛地中腸頂調通鉄殿土同當同當棟土努日乳人粘能馬半番尾秘非肥風斧  
 檻半館州点餅東匠毒イ末育山内力州調力帶外液蝶類点面誅城局西村勢年流稅料英鉢数内膜状骨長州劇道竜月役  
 折折全全全煎蘇宗瘡ウ粗体泰体体丹短胆地中腸蝶鳥痛底天都同東當同當都塗日乳人年腦白万班飛悲非飛風賦



音本態數液內  
員數料着点料料料重狀品曜法料風片腸官点料疊片現限言人曜便量  
直日百部葉埒  
概顏巾欠見香材重症上水說染台斷直東難燃半半表分方名木用流

男限害數員外  
料數量柑点当料領橫猩耐万教万胆念面皇天數歲分輕騷鳳頭炭点流  
嫡日百負役埒  
飲回含金欠見工宰縱猩燒數說先大斷帳天南年万半剽物鳳餽木要流

馱王力精論中  
鑑念瓢數相數糧難金直民王炭王數段灯王所号半半方性皇才面件宮青  
着仁筆不勿洛  
印怨干虛血現口災借正人親石先代段提天難年番半百仏法漫面要竜緑

類曜怯警代雁  
數万天面數數胆現点皇民宮所人數前鮮人京限行人万數王歲桶件王燭  
畜土卑婦日落  
因億寒局計間豪再弱上臣神関善对丹朝天南年版番百複法万面用竜蠟

力數岸長材外  
梅病數端數數限教件談官沢人數數數轉豆皇減人千民当數相悠中石  
畜度彼副木洛  
塩臆関極係件号際実条冗新贅仙大單丁転納人半万百貧弁枚面悠陸蠟

方分音巾數番內着數皇數号數弱敬翁數量整船大斷頂点內乳藩斑百表變本滅約樂老王日  
他毒撥布無夜杵案橫卷教偶元恒蒟失蕉常少整船大斷頂点內乳藩斑百表變本滅約樂老王日

數分力蓮代郎外宮業數言量限數源產品數數量先生面元宮刃刀本点纏面面当源相答公數樂  
打鉄迫白末野杵行因函狂斤権口根産術乘小正先側单中天鈍日罰半半氷別本滅問雷曆道

數山米年王物數党形定皇曜金場檀念量數面限制數量点央數堂數菜天面筆莊宮銘數數量淡福  
多鉄白百魔藥里惡印勘教金現工黒殘重定正制全総濁中定堂日百半反瓢別本銘文容量冷大

音学王檀數難軍相号点數杏數后炭數量數名量哉數名生數曜天數民數量方面數言領方月  
濁哲霸白步厄陸惡院合級銀軒皇黒算収小小数善総大畜底同日腦半蛮票分方命文要両正

庵子量代桑剂学嬌導數團曜料王數点數便量言量便面王數喃淡疊民情數胆數限量端速  
沢弟熱百扶薬力愛引画逆金月原国冊重少小水宣全大斷帝頭喃濃半万表分放名門用両早

3 型

4 型  
c. 総計27437例中 適例23696 (約86%) 反例3741 (約14%)

★ [謝辞]

研究の機会を与えて頂きました京都大学文学部西田龍雄教授・同学部壇辻正剛助手(当時)に深謝致します。又、熱心にご討論頂きました、岩井康雄・吉田夏也両氏並びにATR自動翻訳電話研究所音声情報処理研究室の皆様にお礼申し上げます。

★ [注]

(注1) "determiner-like"・"quantifier-like"という表現はKageyama(1982:226)に従った。句坂(1986:63)の「同格」もほぼこれに相当すると思われる。

なお、ここでKageyama(1982)の"compound"について簡単に触れておく。

Kageyama(1982)では、無・未・不で始まる語は(非と異なり)、後部字音要素としてcompoundを持たない旨が述べられている。無責任における責任はsimple wordとして(つまりcompoundでないものとして)扱われている。

尤もKageyama(1982)は、2字の字音語を全てcompoundと認めないのではなく、出火・握手・帰国・在宅・離日・銃殺・水死・再婚・連勝・同居・力走・独奏・大勝・全敗・完走・一読・大学等は"Sino-Japanese compound"と認められている。

しかし例えば無記名・無失点・無欠席・未記帳・未現像・未成年・不特定の後部字音要素記名・失点・欠席・記帳・現像・成年・特定はどうだろうか。記名・失点等が、上掲の出火・握手他と同様compoundであるが例外的に無・未・不と結合するのか、それとも出火・握手他と違ってcompoundでないのかは不明である。

(注2) 但し金閣寺・東大寺等は頭高型で例外となる。詳細は佐藤(1989:241-2)。

(注3) (18)に関しては以下の例外が従来から知られている。即ち、後部要素が中高型でも、最終音節上にアクセント核が有れば次の①②のように、(18a)でなく(18b)に従うことが有る。

① 速度+制限(3型)=速度制限(4型)

② 製缶+工場(3型)=製缶工場(5型)

しかし、絶対+多数(2型)=絶対多数(6型)のように(18a)に従うことも有る。そこで後部要素が中高型だが最終音節上にアクセント核が有る場合、(18a)(18b)いずれに従うかの基準が問題となる。この問題を扱ったものとしては佐藤(1989)等有る。が、本稿ではこの問題には触れない。

(注4) 本稿は接辞付加をも考察対象とする関係上、気味にも(「気味が悪い」等のように自立的に用いられる場合と同じ)アクセント型を設定している。

(注5) ここでの議論と直接関わりを持つものではないが、佐藤(1989)の考察対象である「複合語」について述べておく。まず、佐藤



(1989)には儀式・数式等の例も挙がっているので、2字の字音語も佐藤(1989)の「複合語」に含まれることが確認できる。また佐藤(1989)の「複合語」は、接辞と語基との結合をも含んでいる。なお佐藤(1989)もMcCawley(1977)と同様、記述対象として和語等を含んでいる。佐藤(1989)は後部要素が短い場合、結合結果のアクセントが予測困難な点に触れているが、特に字音語に限っては、比較的簡単に処理できるのではないと思われる。

(注6) 0.2.で述べたように「漢語」には狭義と広義が有るし、また一般に「複合語」であるかないかの境界も微妙にならざるを得ない部分がある(cf. 野村1988)。この意味でMcCawley(1977)の「漢語複合語」も実体がやや不鮮明であるが、2拍の数珠は'long'と扱われているから、McCawleyは数珠を(彼の)「漢語複合語」と考えていることになる。少なくとも2字の漢語(狭義)はMcCawley(1977)の「複合語」に属するようである。

(注7) 本来ならばここでは、後部要素が尾高型のものも挙げるべきだが、これは(12)に挙げた御返事等に限られ、適当な語例が見あたらず省いた。

(注8) 次の◇に記した結合において、前部字音要素と後部字音要素のアクセントがともに全く影響を受けない場合(例えば役所勤務)は、(34)によれば「保存」ではなくresettingとなる。つまり語中でresettingが成立するからといって、語中に所謂アクセントの谷ができるとは限らない(尤も逆は常に正しい)。◇も同様で、例えば対訳辞書はresettingの成立と考えられる。

- ◇ 尾高型の前部字音要素と頭高型の後部字音要素が結合する場合
- ◇ 平板型の前部字音要素と頭高型の後部字音要素が結合する場合

このように考えれば、例えば「京都北部はresettingを成立させ得るが東京北部は成立させ得ない」等と考える必要も無いことになる。

(注9) 匂坂(1985:63-4)には、結合結果のアクセントに関与的な要因として「構文上の相違(連体修飾、同格)」「強調」「その他(名詞性名詞と動詞性名詞の相違等)」が挙がっている。「構文上の相違」は(注1)のとおりで、特に問題は無い。本稿が設定した「語彙化」以外に、「強調」「その他」の要因が必要なかどうかについては、判断を保留したい。

(注10) 但し次の◇の反毛はresettingを成立させ得る。よって毛のような固有名詞は1字でも、2字の場合と同様に扱われなければならない。

- ◇ 毛氏とまっこうから敵対する楊氏の陣営では、この日も反毛のシュプレヒコールが何度も行われた。

(注11) (46)の語例は原則として窪園(1987)から引用したが、本稿の考察対象内の適例が記載されていない場合は、代わって筆者が作成した。

なお窪園(1987)の分類は「複合名詞」を対象としたものであるが、ここで言う「複合名詞」は「複合語」と置き換えても問題は特に無いと判断した。

(注12) 上述の(46a)については、窪園(1987)では選手宣誓のような字音「複合語」のみが挙げられているだけで、それ以外の例は無く、言及もされていない。字音「複合語」以外の複合語については定延(1987,1988)・佐藤(1989)の指摘が有る。ここでは定延(1987,1988)の指摘を紹介する。

例えば絨毯敷きについて考えてみる。①②のうち、①では「ジュウタンシキ(連濁せず5型)」「ジュウタンジキ(連濁して0型)」いずれの読み方も可能だが、②では「ジュウタンジキ(連濁して0型)」の読み方しかできない。

- ① (内装の職人が)「窓もはめたし壁も塗った。あとは絨毯敷きをやるだけだ。」  
② 「その部屋は床に絨毯が敷いてあります。つまり絨毯敷きの部屋です。」

このように、絨毯が「敷く」のヲ格目的語であっても、絨毯敷きが行為を意味するのか、状態を意味するのかによって、アクセントや連濁の点で異なった結果が現れることも有る。

(注13) 窪園(1987)の「複合」とは接辞付加を含まないようなので、(50)において幾分接辞的色彩の濃い要・独特・名産等はそもそも窪園(1987)の対象外とされる可能性も有る。名産については、現代語でも「名産する」と言えるのかどうかは疑問であり、このため(48a)には入れず(50)に特記した次第である。

★[参考文献・参考資料]

- 天沼寧・大坪一夫・水谷修 1978. 「日本語音声学」.東京:くろしお出版.  
大石強 1988. 「形態論」.現代の英語学シリーズ4.東京:開拓社.  
奥村三雄 1961. 「漢語のアクセント」『国語国文』第30巻第1号,京都大学国文学会,1-16.  
———. 1963. 「漢語のアクセント - アクセントから語彙論へ - 」『国語学』55,36-53.  
———. 1964. 「漢語アクセントの一性格」『国語国文』第33巻第2号,京都大学国文学会,48-68.  
影山太郎 1980. 「日英比較 語彙の構造」.東京:松柏社.  
———. 1985. 「語形成に関する雑ノート」『言語文化研究』,大阪大学言語文化部,37-54.  
教科研東京国語部会・言語教育研究サークル 1964. 「単語の作り方」『語彙教育 その内容と方法』,178-84.  
金田一京助・見坊豪紀・金田一春彦・柴田武(編) 1981. 「新明解国語辞典」.(第三版)東京:三省堂.  
金田一京助・柴田武・山田明雄・山田忠雄(編) 1989. 「新明解国語辞典」.(第四版)東京:三省堂.  
金田一春彦・池田弥三郎(編) 1978. 「学研国語大辞典」.(第二版)東京:学習研究社.  
窪園晴夫 1987. 「日本語複合語の意味構造と韻律構造」『アカデミア文学・語学編』,第43号,南山大学,25-62.  
見坊豪紀 1964. 「複合語(β結合)」『現代雑誌九十種の用語用字』,



- 国立国語研究所報告25,240-61.
- 齊賀秀夫 1957. 「語構成の特質」『講座現代国語学ことばの体系』東京:筑摩書房.
- 句坂芳典 1985. 「音声合成のための韻律制御の研究」.早稲田大学学位論文.
- 句坂芳典・佐藤大和 1983a. 「日本語単語連鎖のアクセント規則」『電子通信学会論文誌』Vol.66-D, No.7, 849-856.
- \_\_\_\_\_ 1983b. 「長い複合語におけるアクセントと音調パタンの性質」『日本音響学会講演論文集』2-2-2.
- 定延利之 1987. 「日本語N+V(連用形)の複合語について」(1986年度京都大学文学部卒業論文)
- \_\_\_\_\_ 1988. 「日本語複合名詞「N+V(連用形)」について」関西言語学会『KANSAI LINGUISTIC SOCIETY』8, 67-76.
- 佐藤大和 1989. 「複合語におけるアクセント規則と連濁規則」杉藤美代子(編)『日本語の音声・音韻(上)』講座日本語と日本語教育第2巻, 東京:明治書院., 233-65.
- 佐山(小和田)佳予子 1975. 「接頭辞「大」のよみ方について」『日本語教育』28, 75-9.
- \_\_\_\_\_ 1986. 「おお - だい - たい - (大)」『日本語学』第5巻第3号, 東京:明治書院., 36-42.
- 杉本武 1986. 『いわゆる日本語助詞の研究』. 東京:凡人社., 225-380.
- 高松政雄 1981. 「漢語アクセントをめぐる」『岐阜大学教育学部研究報告 人文科学』第29巻, 77-83.
- 田島毓堂・丹羽一彌(編) 1978. 『日本語尾音索引 - 現代語編』. 東京:笠間書院.
- 鶴岡昭夫 1988. 「複合名詞のアクセント - 四拍名詞どうしの複合の場合 - 」『日本語学』第7巻第5号, 東京:明治書院., 13-22.
- 並木崇康 1985. 『語形成』. 新英文法選書2, 東京:大修館書店.
- 西尾寅弥 1965. 「単語のなり立ち」『口語文法講座6 用語解説』, 東京:明治書院., 345-375.
- \_\_\_\_\_ 1976. 「造語法と略語法」鈴木孝夫(編)『日本語の語彙と表現』日本語講座第4巻, 東京:大修館書店., 27-62.
- 仁田義雄 1980. 『語彙論的統語論』. 東京:明治書院.
- 日本放送協会(編) 1985. 『日本語発音アクセント辞典』.(改訂新版)
- 野村雅昭 1972. 「副次結合語の構造」『電子計算機による国語研究』V, 国立国語研究所報告49, 1972, 72-93.
- \_\_\_\_\_ 1973a. 「否定の接頭辞「無・不・半・非」の用法」『ことばの研究』第4集, 国立国語研究所論集4, 1973, 31-50.
- \_\_\_\_\_ 1973b. 「三字漢語の構造」『電子計算機による国語研究』, 国立国語研究所報告51, 1974, 37-62.
- \_\_\_\_\_ 1974. 「四字漢語の構造」『電子計算機による国語研究』; 国立国語研究所報告54, 1974, 36-80.
- \_\_\_\_\_ 1977. 「造語法」大野晋・柴田武(編)『語彙と意味』岩波講座日本語9, 東京:岩波書店., 245-84.
- \_\_\_\_\_ 1978. 「接辞性字音語基の性格」国立国語研究所報告61『電子計算機による国語研究』, 1978, 102-138.
- \_\_\_\_\_ 1987. 「複合漢語の構造」『朝倉新日本語講座1 文字・表記と語構成』東京:朝倉書店., 130-44.
- \_\_\_\_\_ 1988. 「二字漢字の構造」『日本語学』第7巻第5号, 東京:明

- 治書院.,44-55.
- 風間力三(編) 1979. 『大言海分類語彙』東京:富山房.
- 森山卓郎 1986. 「接辞と構文」『日本語学』第5卷第3号,東京:明治書院,19-27.
- Allen, M. 1978. "Morphological investigations", unpublished.
- Higurashi, Y. 1983. The accent of extended word structures in Tokyo standard Japanese,Tokyo:EDUCA.,59-77.
- Hyman, L.M.(ed.) 1977. Studies in stress and accent.  
(Southern California Occasional Papers in Linguistics No.4)
- Kageyama, T. 1982. "Word formation in Japanese", Lingua,57,215-58.
- Kubozono, H. 1985. "On the syntax and prosody of Japanese compounds", Work in progress, No.18,60-87.
- \_\_\_\_\_. 1987. "On the phonetics and phonology of the accent-induced F0 fall in Japanese", Linguistics and Philology, No.7,1-21.
- McCawley, J.D. 1968. The phonological component of a grammar of Japanese.(Monograph on Linguistic Analysis No.2) The Hague:Mouton.
- \_\_\_\_\_. 1977. "Accent in Japanese," Hyman(ed.) 1977,261-302.
- Shibatani, M. 1972. "The non-cyclic nature of Japanese accentuation", Language, Vol.48,No.3,584-95.
- Shibatani, M. and Kageyama, T. 1988. "Word formation in a modular theory of grammar", Language, Vol.64,No.3,451-84.
- Siegel, D. 1974. 'Topics in English morphology', Ph.D.dissertation, MIT.